

---

# 障害者でペテンでメカニク

Mirage wolf

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

障害者でペテンでメカニック

### 【Nコード】

N9048Z

### 【作者名】

Mirage Wolf

### 【あらすじ】

その一、主人公は障害者である。右目は異常なまでの視力であるが嗅覚と味覚は無い。その二、主人公はペテン師である。交渉において重要なのは相手を騙すことであり、嘘を吐くことは人間誰でも必要なのだ。ただ、度合いが通常よりも多いだけ。その三、主人公は機械がいじくれる。葬儀社と呼ばれるその組織ではかなり珍しい上に重要である。これら総てを踏まえたのが少々外見も性格にも難有る18歳である。



## 「モノクロと眼帯 Monochrome and one eye」

鼻をつく機械燃料と油、汗の臭い。今の時代には明らかに時代錯誤的な乗り物や機械。物言わぬそれらが黒い空間で乱雑に転がっていた。

現在、2039年という時代では10年以上前より大きな技術革新が進んでおり、旧世代の機械や乗用車、バイクなどは地球環境へと及ぼす悪影響などのことから残らず廃棄されている。何処かの家屋の倉庫に眠っているものも有るのかもしれないが、それが機械特有の伸びを上げて稼働する時はおそらくないだろう。

葬儀社 GHQによる他国支配から日本解放を目指すレジスタンス集団。悪く言えばテロ組織。まだ表立っての行動は其処までではないが、隔離されている六本木でその名を知らないものは限りなく少ないだろう。ましてやその首領たる恙神<sup>つがみ</sup> 涯<sup>が</sup>という少年を知らない者はおそらく居ない。

六本木フォートにある葬儀社の拠点。元々暗いそこだが圧倒的な暗闇の空間が機械などが乱雑に転がった、此処であり、名目上は倉庫暗闇で見取りづらいがそこには異形の巨人型機械が聳え立っている。その巨人の足元では大きくは無い人影がコンクリートの床に置かれた全体三メートルほどの何かに向かって手を忙しく動かしてた。

「コレは……ここで、ん？ この配線間違ってる……誰だよコレ組んだヤツ。ていうか、一回バラしたのかよ。道理でエンジンに何の問題もない割に稼働しないわけだ。有り得ねーよ」

がちやがちやと機械の内臓へと手を突っ込み血管である導線を繋げていく。度々携帯端末のディスプレイを確認しながら機械に手術を

施すその影は少年だった。

歳にして18なのだがあまり高くない背丈から幾分幼く見えてしまう。右目には事故か病気で患ったときにもらえるような白色の医療用眼帯がびつたりと付いており、右目を隠している。しかし、目を引くのはそこではなき髪色だ。ちょうど胴体を半分に分割すると右が黒、左が白というなんとも言えない奇抜な髪色をしていた。顔立ちは明らかに日本系。半分だけでもちろんのこと染めているのではなくこれも右目と同じく障害の一部であるということに気付く人間は少なくないだろう。左の白髪は茶色い機械油のようなもので所々汚れており、大きな汚れは無いが色のせいで恐ろしく目立っている。スパナやらペンチやら現在では機械が全てやってしまい必要性の薄くなってしまうた工具を慣れた手つきで操り、部品を無機質の身体へと差しこんでいく。カチリ！とプラグを組み合わせた瞬間、倉庫の巨大な扉が歪な音を立てて開いた。

「また機械弄りか……いい加減に寝る時間だ。区切りをつけて止めたらどうだ？ 漂よう」

そこまでの威力では無ければミサイルにも耐えられかつ軽量。今でこそあまり注目されていないが一昔前までの世界最硬軽量のマグネシウム合金の扉から現れ、呆れた声で呼びかけるのは長い金髪の美少年。どこか威圧するような風格とカリスマを纏った少年は実際のところ機械をいじくる少年、霧谷きりたに 漂ようよりも若いのだが年上に見えてしまう。この男こそ恙神つがみ 涯がいである。

組織の首領たる涯の呼びかけに答える声は無い。依然として漂は名指しで呼ばれるも工具左手に端末右手に機械を修理しているのだから造っているのだから作業を続けている。完全な無視だった。

ハア、とため息。怒るでもなく呆れ。涯は何度も何度もそれこそ数



「ハイハイ、今日も騙された俺の不幸でメシウマ。他人の不幸は蜜の味ってか？」

「話を聞け。で、どうなんだ。役立つものは造れそうなのか？」

話を聞けはお互い様だろうに。

漂は心の中で毒づく就先ほど放り投げたスパナと端末を暗闇で探し、拾い戻ると機械の身体へと再度目を向けた。涯も同じくソレへと視線を移す。

「1975年の木田技研工業製大型二輪。元のネームは『ヴァルキユリア・ルーン』。前にアメリカでの物資援助の交渉があっただろ？ あその時に廃車になってたヤツを頂いてきた」

「ほう……」

単車バイクのことなどほとんど知らない涯であったが、組織の役に立つものとなれば知っておくべきだろうと、興味深げにフレームの付いていない内臓丸出しの機械を眺めた。

今では道路を走らない二輪の機械馬は日本的なデザインではなく、アメリカから頂いたという言葉通りに旧日本が憧れたであろうアメリカンなスタイルの大型バイク。二人は乗れそうだ。

「中のプラグやら配線やらが少しイカレてたからつけ直して、つい

でにフレームはエンドレイヴの装甲を使うつもりだ」

「成程。だから皆にエンドレイヴの破片を集めさせていたのか。それは強化のためか？」

「That's Lighthouseだ、……っ」と

英語で涯に答えると機械の内部から手を離して直ぐ隣に置いてあった薄い青色の板を取る。スパンも工具箱へと戻し、代わりに人をぶっ叩けば気絶くらいはしそうな大きさのドライバーを取り出してフレームをボディへとはめこみながらこれまた大きい螺子で締めつけていく。その様子を涯は無言でただ見つめている。普段なら涯は直ぐ去るためにあまり気にならない漂だが、組織のためとはいえ作業を凝視されると集中力が途切れる。というか、涯の存在感が有り過ぎて背後に居ると物凄く気になるのだ。

……もしかして、寝るまで居座るつもりか？

端末に表示される時刻は……午前三時。

「げえ……もう朝になるじゃんか」

「だから言っただろう。二度目だがいい加減に寝ろ。俺も寝る」

踵を返すと涯は入ってきた扉へと向かいポケットに手を突っ込みながらヒラヒラと手を振って少しだけ灯の付いた道へと消え去った。

よく考えれば夕飯も摂っていない気がする。じゃなくて摂って無い  
……  
味覚、嗅覚は無くても腹は空くし、もちろんのこと栄養失調にもな  
って死ぬ。ただの障害者であって耐久力は普通の人間なのだ。

「……明日の朝は久しぶりに米かな」

ポケットに入った携帯食料の入ったビニールを取り出すと、一瞥し  
てから戻し大きく欠伸してから倉庫を去った。重くも軽くないマグ  
ネシウム合金の扉をきちんと閉めてから。

「モノクロと眼帯 Monochrome and one eye」(後書き)

畜生……綾瀬が可愛すぎるのが悪いんだからなッ!! いのりも好きですが…ダメだ…集さんの嫁と化している……。

ということと更新する際は綾瀬へのアレが爆発している時と云うことになります。(どうということだ!?)

ついでにバイクの名前は架空のモノですが「バルキリールン」というバイクはホンダから本当に出ています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9048z/>

---

障害者でペテンでメカニック

2011年12月28日13時49分発行